

八戸市の種差海岸には毎年多くの観光客が訪れ、みちのく潮風トレイルを散策しながら、初夏にはニコウキスガ、ノハナシヨウブ、秋にはハマギク、コハマギクなど多くの野生の草花を楽しんでいる。植物生態学者の目からみると、この地域には無島から種差まで生地までの約7キロという狭い範囲に「海崖植生」「塩沼地植生」「海浜植生」という海岸植生のフルセットがほぼ自然の状態に残っており、興味深いエリアだ。



③ 鮎川恵理准教授

自然かく乱が生む植生



私は東日本大震災の津波が襲う前の2010年からこれまで、八戸市小舟渡平から久慈市北侍浜の各地で、岩礁海岸にある「海崖植生」の変化を調査した。津波直後は、土壌流出による植生部の裸地も、海岸特有の植物ではない

水の栄養塩類も陸上に飛ばされる。つまり、海と陸の境目は、常に波や風により動いている物質循環の境界域でもある。そして、波や風は当然、陸上の海岸植生に影響を及ぼす。

ノゲシ、ヘラオオバコなどの種が消滅するなどの変化があった。津波時だけの影響だろうか。と疑問がわき、現在も継続して調査している。ある年の春先、調査地に行ってみると、冬の間土壌流出と裸地化が起こっていたところを見つけた。津波の影響の時と同程度かそれ以上の基質の変化があった。調査を重ねると、夏から秋の台風あるいは冬の発達した低気圧による高波や高潮も、海崖植生に津波並みの影響を与えることが明らかになってきた。



物には、その生育地で子孫を残すのになくはならない重要なものなのだ。自然かく乱があるからこそ、この海崖植生が成り立っているといっても過言ではない。

つまり、海洋や波浪の影響を受けやすい波打ち際近くの植物は、数年に1度、大きな自然かく乱を受けるのが普通なのである。前年までなかった岩の隙間にウンラン、ハマツメクサ、ハマボスなどが一斉に侵入する年もあり、種子は台風などによる高波を利用して、生育地を拡大しているとも考えられるのだ。

海岸の植物の一部は新たな生育地への侵入の機会を、高波や潮位の大変化という自然かく乱にゆだねているようにある。かく乱は、ある種の植

火曜日隔週企画

種差海岸を継続調査

半自然草原もあり、多様な陸上生態系がひとつのところで観察できるのも魅力だ。陸上の海岸植生と海中の潮間帯のあいだ、海と陸の境目では何が起きているか。陸域からの淡水の流入は海へ栄養塩類を与え、それらの栄養塩類は、浅瀬の海藻類や植物プランクトンなど光合成をする海中の植物が利用し、海洋の生態系を支える。一方、海

一口メモ

海岸植生…塩分を含んだ砂質土壌や潮風などの影響の下で生育している植物群落で、強風、乾燥、塩分、飛砂などに耐える植物が優占する植生である。基質の特性により、岩上に成立する海崖植生、砂浜に成立する海浜植生、塩性の沼や湿地に成立する塩沼地(塩湿地)植生に分けられる。

かく乱…生態系の機能、構造に影響を及ぼす破壊的な作用のこと。台風、雪崩、地滑り、火山の噴火、山火事、洪水などの自然かく乱のほか、伐採、採草、放牧、火入れ、踏みつけなどの人為かく乱もある。